

柄ノ鎧ヲ持セザルハ、日域ノ武夫ノ法ナリ、平松長久手ニ於テ、旗本ノ前ニテ衆ヲ離レ、獨リ進デ一番鎗ヲ合セタルニ、其後ニ繼者ナシ、コレニ由テ源君新知二百石ヲ賜フ、平松衆人ノ中ニ出テ、男子ノ勇トスルトヨロハ、只戰場ヘタラキニアリ、喧嘩ヲ好ムハ下僕ノ業ナリ、我今度長久手ニ於テ、年來出サマル勇ヲ出セリ、我ガ後ニダニ繼タル人ナシ、人各能アリ、不能アリ、我喧嘩ニハ誠ニツタナシ、敵ト相合トキハ、人ヨリ勝レヌト云、コレニ對ル者ナシ、

〔菅氏世譜〕文祿三年朝鮮在陣略中、二月十三日、長政公田黒又山に入て虎を狩給ふ、長政公鐵炮を以て、かけ来る虎を間近く寄て打殺し給ふに、其後猛き虎一つかけ來りしを、長政公又鐵炮を構へ待給ふ所に、虎脇に人有るを見付け、長政公の方へは來らずして、正利が興力の足輕列居たる所にかけ來り、一人をば肩をくはへて後へなげ、一人をば其腕をくらつて倒す、是を見る者、恐怖せずと云者なし、此時正利は朱塗の鎧を著たりしかば、人多き中にも、いちぢるくや見えけん、正利をめがけ懸來りけるを、正利八十歳是を見て、少もさはがず、刀を抜てす、み寄かけ来る虎を一刀切る、刀能くされて、虎一聲哮て、即時に倒れんとする所を又一刀切て、終に首を打落しぬ、あ、此時正利の奇代の勇と、其刀の利成るとにあらずんば虎口の害をまぬがれがたがるべし、此刀備前吉次が作にて、長さ三尺三寸一分有り、今に相傳モ、菅の家にあり、

〔老人雜話丁〕加藤清正の先手の大將は、森本義大夫五千石、庄林隼人五千石、飯田角兵衛五千石、左衛門三千石、飯田三宅三千石は普請奉行也、此兩人隱なき武勇の者也、江戸に於て評議ありて、又者にたしかなる武勇誰かと云し、時清正の内飯田角兵衛也、高麗にて天下の人數を引廻したるは、古今にはならずと云、又吉村吉右衛門と云者も、清正の内武勇の者也、

〔常山紀談十五〕關ヶ原の軍に功有ける諸將の家臣を召て、東照宮御盃を下されし時、福島正則の士大將福島丹波は跋尾關石見は瞎なり、長尾隼人は聾なりしかば、近習の人々、能もかたはの集